

大津皇子関係歌の形成と伊勢下向

竹本 晃

はじめに

『万葉集』における大伯皇女・大津皇子の関係歌には、一定の歌物語的なニュアンスが込められているという。配列もおよそ時制どおりとなっており、これらの歌が大津皇子が亡くなってから仮託されたものかどうかこれまで争点となってきた。ただ、橋本達雄氏による一連の論考以降は、あまり仮託かどうかについては論じられることがなくなり、漢詩の方に論点が移っているように見える。仮託について述べられることがほぼなくなったのは、おそらく品田悦一氏が「大津皇子関係歌についての総括的な評価を下すなかで、仮託説が批判的に扱われたからであろう」^②。

しかし、品田氏や橋本氏も述べるように、いずれも論証が難しく、水掛け論になっている節もあり、決着がついたとは言いがたい。現状としては、仮託説もなお影響力があると言える。

このような状況で、本稿が問題とするのは、大津皇子の伊勢下向時ににおいて、大伯皇女が歌を贈るという状況（『万葉集』巻第2の105・106番歌）が可能であったかどうかという点である。これまで、大津皇子の伊勢下向に関しては、大津皇子謀反事件とからめて、歌物語的な歌群の冒

頭をかざるものとして重視されてきた。105・106番歌については、後述するように、後人の仮託とみる向きもあるが、題詞については、ほとんど疑われないのが現状である。ただし、近年では、『日本書紀』にみえる謀反事件とからめて万葉歌を論ずることに注意を促す意見も出されている。^③

そこで本稿は、まず105・106番歌が後人の仮託歌か否かを検討し、実作であることを論じたうえで、大伯皇女・大津皇子関係歌が謀反事件とからむか否か、そして当時の社会システムのあり方から、じっさいに伊勢で大伯・大津の姉弟が歌を贈答し得たのかを明らかにし、ひいては王族・貴族の歌のやりとりの一つの方法を提示するのが目的である。

第1章 大伯皇女歌の仮託説批判

『万葉集』巻第2の105・106番歌は以下の通りである。^④

大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に、
大伯皇女の作らす歌二首

我が背子を 大和へ遣ると さ夜ふけて 曉露に 我が立ち濡れし
(巻第2の105番歌)

二人行けど 行き過ぎ難き 秋山を いかにか君が ひとり越ゆらむ
(巻第2の106番歌)

大津皇子が竊かに伊勢神宮に赴き、飛鳥への復路において、斎宮にいた姉の大伯皇女に逢い、その時に大伯皇女が作った歌としてこの二歌が伝わる。この二歌は、すぐ後の大津皇子による謀反と関連させて考えられ、伊勢に下向したか否かにかかわらず、謀反直前の歌とみなされている。

105番歌冒頭の「我が背子を 大和へ遣ると」などは、「背子」を「遣る」であるから、大和へ向けて愛する人を見送る歌と解釈され、大和以外の場所、つまり伊勢の大伯皇女による表現として無理なくあてはまる。大津皇子と大伯皇女の接触を史実と受け取るか否かは別にして、やはり題詞と歌とは一体化しており切り離せない。

大津皇子・大伯皇女による一連の歌のほとんどの部分を後の仮託歌とする論者がいるなか、105・106番歌については実作とする向きが強い。大津皇子が謀反で自害させられたという事実が、伊勢下向と関連づけられているのであろう。ただし、仮託論者のなかでも見方は分かれている。

巻第2の105・110番歌において、伊藤博氏のように、105・106・109・110番歌は実作で、107・108番歌が物語性を賦与するために編者が創作したとする仮託説がある一方で、むしろ105・106番歌こそが後の仮託歌とする橋本達雄氏の意見もある。^①

橋本氏は、その根拠について、105番歌の「曉露(原文は鶏鳴露)」と「立ち濡れし」が大伯皇女の表現とは思えないこと、そして106番歌

の歌の巧妙さをあげ、実作を否定する。橋本氏の根拠は、おおまかにこの三点であるが、それで成り立つのかそれぞれ検討する。

まず「曉露」であるが、橋本氏によると、『万葉集』のなかでほかに三例しかなく、かつ大伯皇女の時代よりも後代の用例(いずれも天平期と推定)しかない新しい漢語表現で、「斬新な外来的歌語を、一四歳から伊勢の斎宮という、もっとも外来的要素の入りにくいところで青春のすべてを捧げて奉仕した皇女がはたして使えたかといえ、まず否定的にしか考えられない」とする。^②

大伯皇女が都から離れた斎宮にいたのは間違いない。しかし、新しい表現を知り得なかったという意見には従えない。都に帰って来られないのは本人だけで、周囲の人々が制限されているわけではないからである。交通網を発達させた天武朝において、しかも斎宮は、古代伊勢道に連結しており、都の情報が入ってこないという状況は、むしろ想像する方が難しい。これまで行われた斎宮跡の発掘調査報告を^③みても、本当に都からの影響がないと言えるのだろうか。また、『万葉集』だけでも、この時期に十市皇女・阿閉皇女・吹茨刀自などの事例(巻第1の22番歌)が確かめられるように、皇族以下、歌の知識をもった人たちが伊勢に行っているのは明白である。斎宮における人と物の流れは、橋本氏の想定するような閉鎖的空間ではない。

仮託歌とみる根拠の二点目の「立ち濡れし」について、橋本氏は過去の助動詞「き」の連体形「し」で詠嘆をこめて結ぶ手法は、105・109番歌(我が二人寝し)を除くと、すべて柿本人麻呂以降に用いられた表現であるとする。^④橋本氏は同時代の歌として、左のように四首をあげ、いずれも柿本人麻呂関係歌という共通点があることを指摘する。そして最終的

には、巻第1・2（原万葉）を人麻呂が編纂したものとみて、105・109番歌も人麻呂が歌物語風にアレンジしたとする。¹²⁾

ま草刈る 荒野にはあれど もみち葉の 過ぎにし君の 形見とそ来し
(巻第1の47番歌)

今のみ わざにはあらず 古の 人そまさりて 音にさへ泣きし
(巻第4の498番歌)

塩気立つ 荒磯にはあれど 行く水の 過ぎにし妹が 形見とそ来し
(巻第9の1797番歌)

宇治川の 水沫さかまき 行く水の 事反らずそ 思ひそめてし
(巻第11の2430番歌)

これについても二つの問題がある。一つ目は、橋本氏自身も指摘しているように、右の四首はいずれも係助詞「そ・ぞ」の結びで、105・109番歌とは異なっているという点である。もし人麻呂が関係しているなら、105・109番歌のいずれかに係助詞「そ・ぞ」が用いられていてもよさそうなものである。こうした状況では、逆に係助詞「そ・ぞ」を用いていないからこそ別人（大伯皇女）が作ったとも言えてしまう。

二つ目は、アレンジしたとする時期の問題である。大伯皇女（大伯内親王）は、天武朝に斎宮として奉仕し、持統朝には飛鳥へ戻り、大宝元年（701）に薨じている。¹³⁾ 柿本人麻呂は、生没年未詳であるが、歌の世界のなかにおいて、おもに持統朝に活躍した人物である。少なくともこの二人は、同時代を過ごしたと考えなければならない。

柿本人麻呂が大伯皇女の歌をアレンジしたというのならば、同時代に生

きている人の名を用いて、人麻呂が歌を改変・実作しているということになりかねない。大伯皇女の薨後に改作したというのであっても、人麻呂がいつまで生きたかわからず、それに大宝元年から万葉第三期の基準となっている平城遷都までは数年間しかない。そのような曖昧なところに改作の時期を設定するのはやはり無謀であろう。

橋本氏が制作年代が不明だから考察から除いた『古事記』の歌謡一例にしても、結句を「我が二人寝し」（古事記歌謡一九）¹⁴⁾ とするように、109番歌の結句と共通する。古事記歌謡にどこまで柿本人麻呂が関わっていたのかはわからないが、もし橋本氏のように、歌の世界での人麻呂の影響力を評価するのであれば、人麻呂は天武朝から始まる『古事記』の編纂にも参画していたことになりかねない。柿本人麻呂によってすべてを解決しようとする、どこかで無理が生じてしまう。

詠嘆をこめて、過去の助動詞「き」の連体形「し」で結ぶ手法において、これらの事例から導き出せる見解は、むしろ大伯皇女や古事記歌謡に用いられるぐらい古くからある表現で、それを人麻呂が「そ・ぞ」という係助詞を用いて強調させることで発展させたとみるべきではないか。

橋本氏が仮託歌とみる根拠の三点目は、106番歌の歌の巧妙さである。その巧妙さとはつぎの通りである。当時広く歌われていた民謡に「梯立の峻しき山も我妹子と二人越ゆれば安席かも」（日本書紀歌謡六）¹⁵⁾ というハヤブサワケの歌があり、大伯皇女はそれを踏まえて、たやすく越えられない険阻な山路であることを強調させようと、その民謡の発想を逆転させて「二人行けど行き過ぎ難き秋山」を作ったとし、こうした手の込んだ手法は無自覚ではできないと結論づけた。¹⁶⁾

さらに橋本氏は、下二句の「いかにか君がひとり越ゆらむ」について、

旅路を案ずる歌の場合、ふつうは家に戻ってくることを歌うが、この歌はそれとは合わないため、大伯皇女の実感に即して歌ったものではないとし、後人の仮託歌とみる。¹⁷⁾

まず、歌の巧妙さについて検討したい。橋本氏の解釈は、山路の嶮しさを前提としたものとなっているが、注釈書類のほとんどは、契沖以来、心細さという類の心象で捉えている。¹⁸⁾山路の嶮しさで捉えている注釈書は、全集本のみである。橋本氏の解釈は、少数派である。

そもそもなぜ少数派なのかという点、「二人行けど行き過ぎ難き秋山」に山路の嶮しさを想定できないからである。『万葉集』において「秋山」が詠まれているもののなかで、山路の嶮しさを詠んだ歌はない。そのほとんどは、黄葉とのからみで詠まれている。もし山に嶮しさをイメージさせるなら、ハヤブサワケの「梯立の倉椅山は嶮しけど」などの歌のように、嶮しさをイメージさせる「倉椅山」などの固有名詞がきてしかるべきである。²⁰⁾「秋山」ではそれが不足している。よって、民謡の発想の逆転という考えは成り立たない。

下二句については、たしかに愛する人の旅路を案じ、無事に帰ってくることを願うパターンにあてはめれば、大伯皇女の歌ではなくなる。だが、通例のパターンを無理にあてはめる必要はない。大伯皇女は自宅にいないという特殊な環境のもとにいうことを前提に歌を解釈しなければならぬからである。

歌を詠んだ者の視点から解釈したとき、大伯皇女にとっては、まずは弟が無事に飛鳥にたどり着くことが案ずべき内容であるから、自分のもと(斎宮)に戻ってくることは願っていない。願うのは戻ってくるというより、旅路の終着地点にたどり着くことである。大津皇子における旅路と

しての終着は飛鳥である。このように考えれば、旅路の歌としても、大伯皇女の歌としてあてはめることができる。なお、これを謀反事件に係づけてしまうと、飛鳥に戻ろうが斎宮にしようが無事で済まないことになり、旅路を案ずるという視点すら失われる。

以上のように、橋本氏の仮託説は成り立たず、大伯皇女の歌(105・106番歌)には、後人の手は入っていないとすべきである。

第2章 大津皇子関係歌の物語性の有無

前章のように、105・106番歌を大伯皇女の実作とみるならば、その題詞および107・110番歌との関係はどうだろうか。本章では、仮託歌にせよ実作にせよ、まずは大津皇子の謀反事件に至る一連の流れを形成していると考えられている105・110番歌が、本当に謀反事件と関係しているのか否かを明らかにし、さらに近年指摘されているように、一つの物語として編者によって意図的に配列されたのかどうかを検討していきたい。

まず問題となるのは、「竊」という語であろう。『万葉集』の題詞・左注において、105・106番歌の題詞以外のものをあげると、巻第2の90番歌左注、巻第2の109番歌題詞、巻第2の116番歌題詞、巻第12の3098番歌左注、巻第16の3803番歌題詞、巻第16の3806番歌左注の六例となる。

この六例の「竊」を検討した川口常孝氏は、いずれも密通の語義があるとし、その後の研究に影響を与えた。²¹⁾一方、近年の研究の流れでは、「竊」には密通の語義はなく、「竊」がかかる動詞の方に重要性を置き、題詞の

もつニュアンスはそれぞれで検討を行うべき、というようになってきている。²⁴⁾ もっともな見解である。

そうした近年の見解では、共通して105・106番歌題詞に、密通の意味は直接にはないとされている。典型的なものとしては、伊勢神宮に行くこと自体が謀反にあたるとする岡田精司説²⁵⁾を取りあげて、「竊」から「謀反」へという流れにもっていく見解が多数を占める。

しかしながら、大津皇子が謀反と判断されたのは、本当に私幣禁断の制と呼ばれているものに該当したからなのだろうか。これまで当該問題にからめて岡田説を検証したものは見受けられず、たいていは鶴呑みにして論を展開している。あらためて岡田説の論拠をみてみると、『皇太神宮儀式帳』と『延喜式』にそれらしい禁止事項が書いていて、それにかかわる記事がヤマトタケルやハヤブサワケの伝承にみられることと、壬申の乱の時に天武天皇が神宮を遙拝したことのみである。

基本的な部分に立ち返ってみると、『皇太神宮儀式帳』と『延喜式』はいずれも平安以降の編纂物である。したがって、本来ならこれらに記載しているという私幣禁断の制と呼ばれるものが天武朝にまで遡る、あるいは創始したことを証明しなければならない。それについての論証は一切なく、『日本書紀』にそれらしき記事があることで済まされている。私幣禁断の制についての律令制への言及もない。

『皇太神宮儀式帳』全体をみると、「評」の記載など、部分的に古い記載が残っているところもあるが、かたや該当箇所に「幣帛を禁断す。王臣家ならびに諸民には幣帛を進らしめざれ。重く禁断す。若し欺き事を以て幣帛を進る人をば、流罪に准へ勘へ給へ」²⁶⁾とあるなかで、たとえば「王臣家」などという言い方は、七世紀末には用いない表現である。

例として出されているヤマトタケルとハヤブサワケの伝承も、前者は処罰の対象となっていないため除外するが、後者は反逆者となったハヤブサワケがメトリを連れて逃げようとした先が伊勢神宮というだけで、私幣禁断に問われる以前に、すでに反逆者となっており、論理が逆転している。天武の神宮遙拝についても、そのとき使者を派遣して幣帛を備えた可能性があることを指摘しているだけで、私幣禁断の制の存在の根拠ではない。

このように、天武朝の段階で「竊かに伊勢神宮に下」ることが直接謀反にあたるとは言えないのである。よって、大津皇子が謀反を起こしたということ、この二首の歌・題詞は切り離して考えるべきであろう。「竊かに」という語句は、たしかに秘密めいたものを感じさせるところがある。ただ、そうは言っても副詞に過ぎず、いっそなくとも真意が通じなければならぬ。諸説は、そうした副詞に引っぱられすぎてきたきらいがある。

ではつぎに、そのことを編纂の視点から述べる。大津皇子関係歌の105・110番歌のなかで、用いられる漢字表記の三点の違いが指摘されている。²⁷⁾

〔105・106番歌〕

大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に、大伯皇女の作らす歌二首

我が背子を 大和へ遣ると さ夜ふけて 曉露に 我が立ち濡れし
 (吾勢社乎 倭辺遣登 佐夜深而 鶏鳴露尔 吾立所濡之)
 二人行けど 行き過ぎ難き 秋山を いかにか君が ひとり越ゆらむ
 (二人行杼 去過難寸 秋山乎 如何君之 独越武)

〔107番歌〕

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

あしひきの 山のしづくに 妹待つと 我立ち濡れぬ 山のしづくに

〔足日木乃 山之四付二 妹待跡 吾立所沾 山之四附二〕

〔108番歌〕

石川郎女が和へ奉る歌一首

我を待つと 君が濡れけむ あしひきの 山のしづくに ならましものを
〔吾乎待跡 君之沾計武 足日木能 山之四附二 成益物乎〕

〔109番歌〕

大津皇子、竊かに石川郎女に婚ふ時に、津守連通がその事を占へ露はすに、皇子の作らす歌一首 未詳

大船の 津守が占に 告らむとは まさしに知りて 我が二人寝し

〔大船之 津守之占尔 将告登波 益為尔知而 我二人宿之〕

〔110番歌〕

日並皇子尊、石川郎女に贈り賜ふ御歌一首 女郎、字を大名児といふ

大名児を 彼方野辺に 刈る草の 束の間も 我忘れめや

〔大名児 彼方野辺尔 茹草乃 束之間毛 吾忘目八〕

まず単純なところでは、「郎女」(107・108)と「女郎」(109・110)の違いである。これについては、石川郎女でも石川女郎でも、言うところは同じであり、この類いの表記の揺れは今や珍しくはない。こ

では、編纂過程に主眼を置いたときに、「107・108」と「109・110」に区別できるところがおさえられるのみである。

残る二点は、助詞「に」「と」にあてた文字違いである。「に」は、傍線部のように、107「山之四付二」「山之四附二」・108「山之四付二」では「二」を用い、105「鶏鳴露尔」・109「津守之占尔」「益為尔知而」・110「彼方野辺尔」では「尔」を用いている。「と」は、二重傍線部のように、107「妹待跡」・108「吾乎待跡」では「跡」を用い、105「倭辺遺登」・109「将告登波」では「登」を用いている。

このような状況から、107・108番歌と105・106・109・110番歌に分けられ、107・108番歌が物語性を賦与するため後に創作されたとか、逆にこれのみ実作だとか、大津皇子関係歌を考えるさいの重要な分類が提示されている。また、福沢健氏は、これに巻第二の題詞の記載様式の違い(「時」作歌、「歌」という要素を加え、107・108および110番歌を増補として捉えている。

配列において、原万葉の後に、編者の手が加わっているとみえることは、結果にかかわらず共通項目となっている³⁰⁾。この点に関して、筆者はかつて石川郎女について検討したことがある(以下、旧稿と呼ぶ³¹⁾)。題詞・左注および題詞下注をたよりに、主に導いた結論は、107・108・109番歌の石川郎女は同一人物で、それらと110番歌の石川郎女とは別人であるというものである。前者に付け足すならば、129番歌の「大津皇子宮侍石川女郎贈大伴宿禰宿奈麻呂歌一首 女郎字曰山田郎女也。宿奈麻呂宿禰者大納言兼大將軍卿之第三子也」の石川郎女である。すなわち、前者(107・108・109・129)は山田郎女で、後者(110)は大

名児である。

こうした分析から、前述の先行研究を振り返ってみると、まずは増補挿入されたという107・108番歌がなぜこの位置に配列されたかという点がみえてくる。そのもっとも大きな理由は、107・108番歌の石川郎女と109番歌の石川郎女が同一人物であることである。前後のつながりは、それぞれつぎの通りである。

107・108番歌と前の105・106番歌とのつながりは、129番歌の題詞が如実に示している。旧稿で明らかにしたように、「大津皇子宮に侍る石川郎女」とは、大津皇子と結婚して、大津皇子宮に居住していた石川郎女のことである。よって、大津皇子に関わる105・106番歌のあとに続けて、大津皇子と結婚した石川郎女との贈答歌をもってきたのである。

107・108番歌と後ろの109番歌とのつながりは、石川郎女の素性を明らかにしたことで、違った見方から見直すことができる。

〔107〕大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

〔108〕石川郎女が和へ奉る歌一首

〔109〕大津皇子、竊かに石川女郎に婚ふ時に、津守連通がその事を

占へ露はすに、皇子の作らず歌一首 未詳

右に抜き出した題詞を見ると、107・108番歌は、言うまでもなく大津皇子と石川郎女の贈答歌である。男女の贈答があれば、多くは恋人関係や夫婦関係を想定するのが常であろう。これまでは謀反事件や110番歌の日並皇子との問題にからめて、さまざまな見方がなされてきた経緯がある。

しかし、107・109番歌への流れをみると、男女の贈答歌のうしろ

に、その二人が結婚したとすぐ自然な展開を読み取ることができる。ただし、109番歌には「竊かに」がある。しかしこれも、題詞をよく読むと、結婚していたことをまだ公表していないのに、そのことをすでに津守連通が予見していた、ということだけのことである。

109番歌の歌意も、大津皇子の強気な発言であろうと解釈されがちであるが、題詞をみる限り、津守連通の占いがひじょうに優れていたことを称賛しているようにとれ、「竊かに」はそのことを強調しているに過ぎない。歌の大意についても、めでたく発表といった具合であろうか。そこに緊迫感など微塵もない。

では、110番歌への流れはどうだろうか。題詞からは、日並皇子尊と石川女郎が恋仲であるかのようなやりとりがうかがえる。従来の多くの見解は、この石川女郎を大津皇子が奪おうとしたのではないかとし、それが皇位継承問題にも発展し、謀反といった形で幕を閉じるという三角関係で捉えようとしてきた。もしくは、そのような物語の形成がなされたと、程度の違いはあれ、考えられてきたきらいがある。

しかしながら、前述したように、110番歌の石川女郎は、107・109番歌の女性とは異なる人物である。「字大名児」の石川女郎は、『万葉集』のなかでここにしか出てこない。となれば、三角関係の話も、謀反に結びつける見解も、そうした一連の歌物語とみる向きも、すべて成り立たないということになる。

110番歌の配列については、編者がこの歌を増補するさいに、時代順に日並皇子の歌を並べるならここしかないと判断したのであろう。前後の並びをみれば、その場所以外に考えられない。それがたまたま前の歌に同名の人物がいただけである。そこで、編者は紛らわしいと判断して、題詞

下注を付けたのである。³²⁾

したがって、編者が題詞下注をつけて、人物を区別しようとしたのであれば、編者がこれらを歌物語になるように配列したわけではないということが言える。変に謀反事件に関連させようと歌物語化させたのは、契沖以来今に至る研究者たちにほかならない。

第3章 伊勢下向の可能性

大津皇子関係歌105・110番歌は、原万葉からの増補の過程のなかで、編者の手によって機械的に並ぶべくして並べられ、現状のように構成された。すべて大津皇子の謀反事件とは無関係であった。そうであるなら、謀反事件にもっとも関連づけられていた105・106番歌の題詞は、どのように解釈できるのであろうか。論点は、じっさいに大津皇子が伊勢に行き、大伯皇女と逢い、歌を交わしたか否かである。

大津皇子の伊勢下向の時期と行程については、かつて神堀忍氏が詳細な検討を行い、一定の見解を提示した。簡単にまとめると、時期は九月十一日から二十四日のどこかで、公的儀式の無い日を選んで抜け出したとし、その行程は、吉野から高見山を抜けて櫛田川を下っていくルートで、常人でない豪放な大津皇子ならば、夜明け前に飛鳥を出発すれば、夕方には斎宮にたどり着くという。³³⁾

道の峻しきや道順、そして大津皇子の体力的な問題はさておき、まずもって引っかかるのは関の問題であろう。さしあたり、飛鳥・伊勢間に確実に存在する関として、川口関があげられる。川口関は、平城宮跡から出土した木簡に「謹解 川口関務所 本土返還夫人 伊勢国」とみえる関で、

天平十二年(七四〇)十一月に聖武天皇の東国行幸の半ば出発点とも言える「伊勢国志志郡河口頓宮」³⁴⁾との関連がつとに指摘されるところである。

その河口頓宮は、「関宮」³⁵⁾とも呼ばれていることから、川口関が河口頓宮のそばにあったことは想像に難くない。『万葉集』巻第6の1029番歌の題詞にも、内舍人時代の大伴家持がこのときの行幸に従駕し、歌を残したことが書かれている。

飛鳥から伊勢に抜けるさいに川口関を通るのは、名張から青山峠を越えるルート、宇陀から曾爾を抜けて雲出川を下るルート、またはその間を抜けて雲出川に出るルートなどが考えられる。いずれにしても、雲出川流域の出入りはおさえられる関である。

しかしながら、神堀氏が半日で到達すると推定した、吉野から高見山を経由して櫛田川に抜けるルートは、川口関を通らない。おそらく神堀氏は関を通らないからこの道を迂回ルートと推定したのであろう。しかしその推定は、陰しくても往来する道があることが前提のものである。決して道なき道ではない。しかも、そのルートは古代からある主要ルートの一つで、³⁶⁾櫛田川・吉野川・紀の川が流れる中央構造線一帯は、金・銀・銅・鉄・水銀など、貴重な鉱物が豊富に存在することが古くから知られていたという。³⁷⁾

現在までに、『出雲国風土記』の多数の刻の記載と三関を除けば、判明している関はそれほど多くない。ただ高見峠を抜けるルートは、大和国と伊勢国との国境、ひいては畿内との境界にあたるところであるから、こうした主要なルートに関が置かれていなかったとは言いが切れない。

畿内のなかの国境で言うなら、大和・河内国境、大和・山背国境、大和・紀伊国境の付近に関が置かれている。大和・河内国境は、『日本書紀』天

武八年六七九十一月是月条に「是月、初めて関を龍田山・大坂山に置く」とあり、天武朝の段階で、河内へ抜ける主要な二つのルート上にそれぞれ関が設けられていた。この両関は、藤原宮跡から出土した木簡に「弥努王等解平羣大坂二處」⁽³⁸⁾とみえるなど、その後も継続的に機能していたことがわかる。

大和・山背国境は、奈良時代に下るが、橘奈良麻呂を窮問した時の奈良麻呂の発言中にみられる「剗を奈羅に置き」⁽³⁹⁾がそれにあたると、諸説あるが、平城山丘陵のいずれかであろう。

大和・紀伊国境は、神亀元年（七二四）十月の聖武天皇による紀伊行幸のさいに、笠金村が詠んだ歌として「我が背子が 跡踏み求め 追ひ行かば 紀伊の関守い 留めてむかも」⁽⁴⁰⁾『万葉集』巻第4の545番歌）とある「紀伊の関守（木乃関守）」がそれにあたると、この関のある位置が国境と断言できないにしても、南海道上であることは確かで、国境であれば真土山付近、そうでなくとも「我が背子が」の「背」にかけた背ノ山付近に想定できる。

こうした関は、藤原宮跡出土木簡に「符處々塞職等」⁽⁴¹⁾とあるように、複数の関（塞）が置かれ、時期についても、石神遺跡から出土した木簡に「道勢岐官」⁽⁴²⁾とあり、複数あるとみられる関の官司の存在は七世紀後半に遡る。いったいどれほどの関がこの時期に置かれたのかは不明であるが、現状で判明している以外にも関の存在は十分想定できる。しかも、畿内の境界付近であればなおさらであろう。

このように考えると、大津皇子がどのようなルートで伊勢を目指そうとも、必ずいずれかの関に引っかかるはずで、過所をもたずに伊勢神宮や斎宮にたどり着くことは難しいと言わざるを得ない。また、関を避けて道な

き道を進んだとしても、相当時間の要することであろうから、やはり考えるににくい。

では、105・106番歌の題詞は、事実を伝えたものではないのか、ということになると、そうとも言えない。大きく二つのパターンが考えられる。一つは、過所をもっていて、正式な命令のもと伊勢に赴いたという状況である。そうすると、「竊かに」が引っかかるが、題詞と歌は一体であるとはいえず、これは大津皇子や大伯皇女がつけたものではない。「竊かに」が重大な意味をもたないにしても、あくまで題詞をつけた人の認識であり強調であるから、そこまで取り立てる必要はない。

もう一つは、大津皇子そのものではなく、大津皇子に関係する使者が伊勢に行ったという捉え方である。題詞と歌とのからみで言えば、大津皇子の書状が大伯皇女に届けられ、それに対して大伯皇女が歌を返したという状況であり、こちらの方が可能性として考え得る。大津皇子と大伯皇女のやりとりは、何も実態でなくともよい。歌の贈答さえあれば歌は残るわけで、残った歌に対して題詞をつければよいのである。

それが成り立つ具体的なやりとりには何を想定しているのかというと、家政機関の存在である。この二人には、大津皇子宮・大伯皇子宮という皇子宮がある。大津皇子宮は、『万葉集』巻第2の129番歌の題詞に「大津皇子宮に侍る石川女郎」とあり、家政機関とともに、居住者である妻の名もあがっている。大伯皇女は、飛鳥池工房遺跡から出土した木簡に「大伯皇子宮物 大伴□……□品并五十□」⁽⁴³⁾とみえ、大伯皇女の家政機関から工房に物品を注文している様子が見取れる。

家政機関があれば、本人が動かなくとも、その管下の人たちが代理として責務を果たすことができる。しかしその場合においても、関の問題が引っ

かかるが、一つだけ方法がある。それは、家政機関どうしのやりとりのなかで、間接的に歌を届ける方法である。ここで障害となってくるのが、大伯皇女の家政機関である。

大伯皇女の家政機関は、木簡の解釈では、天武天皇が崩御した後、大伯皇女が飛鳥に帰還した朱鳥元年（六八六）十一月以降に機能したと考えられている⁽⁴⁶⁾。だが、大伯皇女が斎宮で奉仕している間、大伯皇子宮はなかったであろうか。つまり、元あった家政機関が家産を没収されてそのつど解体するのかどうかである。

家政機関といえば、長屋王家が著名であり、木簡が大量に出土したことによって、その内実が明らかになってきた。長屋王家の家政機関のなかには、封戸など国家から支給される部分のほかに、山背御園や大庭御園などをはじめとする王家の私領の記載もみられる⁽⁴⁶⁾。こうした家産が、遠方の在任によって没収されることはない。斎宮の任命について、大伯皇女の時代は終身ではなく、結果として天皇の代ごとの交替であった。かりに家産のすべてが没収されたとしても、斎宮解任のさいに戻されてしかるべきである。しかしそれでは、事務手続きや人の異動が半端な量では済まないであろう。

そもそも斎宮が特殊な位置づけにあるとはいえ、大宰府や諸国司などの遠方地の在任と変わらないのではないか。たとえば、大宰府の長官が大宰府条坊域のなかに館を建てて住んでいても、都から家政機関の機能をすべて持ってくることはしない。なぜなら、任期が終われば妻や子のいる都に戻るからである。

『万葉集』巻第9の1747（1752番歌に、知造難波宮事を拝命した藤原宇合の難波赴任に伴い、宇合家の資人と推測される高橋虫麻呂が、

平城京と難波を行ったり来たりしている様子が詠まれている。本主が赴任先にいるときは、その家政機関で働く人たちが、家と任地との実質的なやりとりを行ったのである。つまり、本主不在でも家政機関は回るのである。

平安初期の斎王の場合においても、朝原内親王家や大原内親王家がそのまま存在し⁽⁴⁷⁾、在任の状態で家産運営がなされたことを榎村寛之氏が明らかにしている⁽⁴⁸⁾。このように考えると、七世紀後半の大伯皇子宮も、本主不在のなかにあっても、家政機関として機能していたと考えて、何ら問題はないのである。

在任中に家政機関が機能していた可能性は、「大伯皇子宮」の木簡の年代からも指摘できる。飛鳥池工房の操業と終業時期について、市大樹氏は、天武七年頃から本格的な操業を開始し、藤原遷都頃には本格的な操業は終了を迎えていたとする⁽⁴⁹⁾。ただし、工房のある南地区において、紀年銘の木簡でもっとも新しいのは持統元年（六八七）のもので、また「サト」表記のうち、「里」表記もあるけれども、「五十戸」表記の方が多いという出土状況がある。

「大伯皇子宮」の木簡が出土した遺構であるSX1222水溜だけでみても、紀年銘は天武十三年（六八四）を示す「甲申年」が一点（一二三三）で、サト表記は、「里」が三点（一〇六・一〇七・一一一号）、「五十戸」が五点（一〇五・一〇九・一一〇・一一五・一一八号）となっている。ちなみに、北隣のSX1220水溜からは、天武六年を示す「丁丑年」（二二号）と先述した持統元年（六八七）を示す「丁亥年」（一八号）の紀年銘と、「里」表記が三点（二〇・二二・二三号）、「五十戸」表記が三点（一八・一九・二四号）、南隣のSX1224水溜からは、「五十戸」表記が二点のみで（一三二・一三三号）、さらに南隣のSX1226水溜からは、

推定も含む「五十戸」表記が三点のみ（一二六〇～一二八号）となっている。

たしかに「里」表記の木簡が混じっていることから、最終的に持統朝に機能していた遺構であると解釈すべきであろう。しかし、重要なのは、木簡の廃棄年代ではなく、「大柏皇子宮」の木簡が天武朝に書かれたものであるかどうかである。現在の解釈では、可能性はまったくないというような位置づけになっているが、出土している木簡の割合は天武朝の方が多い。こうした出土状況から、「大柏皇子宮」木簡も天武朝に書かれた可能性を十分考慮しておくべきではないだろうか。

このように、大柏皇子宮が天武朝に機能しているとなると、105・106番歌の題詞に一定の解釈が与えられる。それは、大津皇子が直接伊勢に行ったのではなく、大津皇子の歌文が伊勢に運ばれたという見方ができる。それを可能にしたのは、大柏皇子宮の舎人である。飛鳥の大柏皇子宮と齋宮とで、定期的に事務的なやりとりをすれば、過所も発行され、難なく関も通過できるであろう。したがって、大津皇子宮から大柏皇子宮の舎人を介して齋宮に歌文を届けるという状況が考えられ、受け取った大柏皇女も歌を返し、あたかも贈った歌文自身が大津皇子であるかのような歌を詠んだという見方である。

大柏皇子宮の本来の事務的用件は、齋宮でも神宮でもあり得た。このときの齋宮は、いまだ奈良時代の齋宮寮のような整った組織になっておらず、また予算配分や物資調達方法についても、神宮に大きく依拠していたように^⑤、神宮とのやりとりは密であったと思われる。そうした社会状況と歌文としてやりとりがなされた実体をふまえて、題詞の編者が「大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に、大柏皇女の作らず歌二首」とつけたのである。

むすびにかえて

以上のように、大津皇子関係歌巻第2の105・110番歌を考える。実作歌か仮託歌かという問題について、すべて仮託とする根拠はなく、実作とみてよいと判断した。むしろ、仮託の疑いがかけられたのは、歌の内容というより、大津皇子の謀反事件にからめた目で見えてしまったからであった。

結論としては、謀反とはまったく関係のない歌が並んでいた。むしろ、並び方が整然とし過ぎていたため、編者の作為性を感じさせたのかもしれない。だがじっさいは、単純な配列であった。まず大津皇子を中心に据えた姉の歌、大津皇子と婚姻前の石川郎女との贈答、婚姻の公表と認知、そして同時代の日並皇子の歌が並べられていた。日並皇子と歌を交わした石川郎女は、別人の石川郎女である。これらのなかに、恋敵や謀反に関わるような歌物語的な要素は一切見受けられない。

そのうえで、105・106番歌の題詞の解釈の仕方考えた。直訳してしまうと、やはり無理が生じる。そこで、家政機関というものに注目することによって解決を試みた。具体的には、大柏皇女の家政機関である「大柏皇子宮」が、齋宮在任中も機能していたと考え、飛鳥と伊勢との事務的な通信のやりとりの存在を指摘した。

これまでは、伊勢神宮にいかなる用事があるのかという問いから始めて、謀反しかないであろうとする答えが解釈の底流にあった。単独でいくら神宮に赴いても、なんら成就しないことは明白であるにもかかわらず、謀反説がもっともなように信じられてきたのである。

しかし、大柏皇子宮の舎人を介した通信のやりとりを想定するならば、

関の問題および伊勢や齋宮への特別な用件も考えずに済み、かつ齋宮の大伯皇女との歌の贈答も可能となった。そのみならず、歌の贈答のあり方としても、当人と当人ばかりではなく、皇族なら舍人を介した歌文のやりとりも、今後は想定していく必要があるであろう。

〔注〕

- (1) 橋本達雄「大津皇子・大伯皇女の詩や歌は後人の仮託か」『国文学』第二五卷第一四号、一九八〇年（以下、橋本氏A論文とする）、同「二人行けど行き過ぎ難き秋山―大伯皇女の歌一首の発想―」『専修国文』第四四号、一九八九年（以下、橋本氏B論文とする）、後に両論考とも『万葉集の作品と歌風』（笠間書院、一九九一年）に収録。同「大津皇子の悲劇と詩歌」『万葉集を読みひらく』笠間書院、二〇一〇年（以下、橋本氏C論文とする）。
- (2) 品田悦一「大津皇子・大伯皇女の歌」（神野志隆光・坂本信幸編『セミナー万葉の歌人と作品 第一巻 初期万葉の歌人たち』和泉書院、一九九九年）。
- (3) 梶川信行「禁忌の恋?―大伯皇女と大津皇子―」『語文』第一四〇輯、二〇一一年。
- (4) 小島憲之ほか校注・訳『萬葉集①〈全四冊〉』新編日本古典文学全集（小学館、一九九九年）を参照。以下、『万葉集』の原文・訓読文は、おもにこのシリーズを用いる。
- (5) 都倉義孝「大津皇子とその周辺―畏怖と哀惜と―」（久松潜一監修『萬葉集講座 第五巻 作家と作品Ⅰ』有精堂出版、一九七三年）のように、すべて仮託歌とみなす論者もいる。
- (6) 伊藤博「歌群の物語性」〔『万葉集の表現と方法 上』塙書房、一九七五年〕。
- (7) 橋本氏C・A論文。
- (8) 橋本氏C・A論文。
- (9) 『万葉研究の共有化を目指した学際的文献目録の作成』（課題番号15K02220・研究代表者 竹本晃）平成27～29年度科学研究費助成事業・基盤研究(C) 研究成果報告書、二〇一八年、四二頁。
- (10) 橋本氏A・C論文。
- (11) 橋本達雄「万葉集の成立と構成」〔『万葉集の時空』笠間書院、二〇〇〇年、初出は一九九六年〕。
- (12) 橋本氏A・C論文。
- (13) 『続日本紀』大宝元年（七〇一）十二月乙丑条。
- (14) 訓読は、山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』（小学館、一九九七年）を参照。
- (15) 訓読は、小島憲之ほか校注・訳『日本書紀②』（小学館、一九九六年）を参照。
- (16) 橋本氏B論文。
- (17) 橋本氏B論文。
- (18) 『万葉代匠記』巻第二、精選本。『万葉代匠記』は、久松潜一監修・築島裕ほか編『契沖全集』第一巻、萬葉代匠記一（岩波書店、一九七三年）を参照。近年の諸注釈書をあげると、澤瀉久孝『萬葉集注釋 卷第二』（中央公論社、一九五八年）、青木生子ほか校注『萬葉集一』新潮日本古典集成（新潮社、一九七六年）、中西進『万葉集 全訳注原文付（一）』（講談社、一九七八年）、稲岡耕二『萬葉集全注 卷第二』（有斐閣、一九八五年）、阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義（巻第一・巻第二）』（笠間書院、二〇〇七年）、多田一臣訳注『万葉集全解1』（筑摩書房、二〇〇九年）、佐竹昭広ほか校注『万葉集（一）（全5冊）』（岩波

書店、二〇一三年）が、この意味で捉えている。

- (19) 以下、前掲注(4)を全集本と略す。なお、全集本もハヤブサワケの歌を念頭に置いている。

- (20) 類似のことは、すでに平舘英子「大伯皇女の御作歌」(『萬葉悲別歌の意匠』塙書房、二〇一五年、初出は二〇〇九年)に指摘がある。

- (21) 土屋文明『萬葉集私注 一新訂版』(筑摩書房、一九七六年)は、早くから謀反事件に無関係であることを指摘している。

- (22) 品田氏前掲注(2)論文。福沢健「大津皇子歌群の語るもの—歌集が織りなす歴史—」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第四三号、二〇一一年。

- (23) 川口常孝「あかときつゆ—大津皇子の生涯—」(『万葉作家の世界』さるびあ出版、一九六六年、後に桜楓社からも一九七一年に刊行)。

- (24) 大谷歩『万葉集』巻一・大伯皇女歌二首—「竊」の用字をめぐる—「日本文学論究」第六九冊、二〇一〇年、福沢氏前掲注(22)論文、柳本紗由美『万葉集』における「大津皇子物語」—二つの「竊」をめぐる—『玉藻』第四七号、二〇一三年。

- (25) 岡田精司「古代における伊勢神宮の性格—私幣禁断をめぐる—」(『古代祭祀の史的研究』塙書房、一九九二年、初出は一九八九年)。

- (26) 岡田氏前掲注(25)論文の訓読文を用いた。

- (27) 橋本氏A・C論文、福沢健「大津皇子歌群の形成」『國學院雑誌』第九〇巻第一号、一九八九年、福沢氏前掲注(22)論文。

- (28) 伊藤氏前掲注(6)論文。

- (29) 橋本氏A・C論文。

- (30) 『古事記』『日本書紀』『万葉集』の「竊」を比較分析することによって、編

者による「竊」の挿入を指摘した小野寺静子「「ひそかに」考」(『札幌大学教養部 札幌大学女子短期大学部紀要』第一八号、一九八一年)もある。

- (31) 拙稿『万葉集』にみえる石川郎女について『万葉古代学研究所年報』第九号、二〇一一年。

- (32) 題詞下注を付けた人物と配列を決めた人物が、同一人物とは限らない。編纂については、何段階かを想定しておいた方がよいが、本稿ではここまでにとどめておく。

- (33) 神堀忍「大伯皇女と大津皇子」『万葉』第五四号、一九六五年。

- (34) 奈良国立文化財研究所編『平城宮木簡一』(一九六九年)七九号。二次的記載は省略。

- (35) 『続日本紀』天平十二年(七四〇)十二月乙酉条(青木和夫ほか校注『続日本紀一』岩波書店、一九九〇年)。以下『続日本紀』の原文・訓読は、このシリーズを用いる。

- (36) 注(35)に同じ。

- (37) 直木孝次郎「大和と伊勢の古代交通路—高見峠越えについて—」『大和文化研究』第九巻七号、一九六四年。二上山産のサヌカイトが、奈良県吉野町の宮滝遺跡や橿田川中流域、そして伊勢湾を渡って、知多半島から濃尾平野にまで分布していることから、縄文・弥生時代にさかのぼる「サヌカイトの道」の存在が指摘されている(澄田正一「伊勢湾をめぐる考古学上の諸問題」(三重の考古遺物編集委員会編『図録 三重の考古遺物』三重県良書出版会、一九八一年)。

- (38) 和田萃「かぎろひ考」『万葉古代学研究年報』第二二号、二〇一三年。

- (39) 奈良県教育委員会編『藤原宮—国道165号線バイパスに伴う宮域調査—』(一九六九年)七八号。

- (40) 『続日本紀』天平宝字元年(七五七)七月庚戌条。

- (41) 奈良国立文化財研究所編『藤原宮木簡一』(一九八一年) 一二号。
 - (42) 奈良文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(十七)』(二〇〇三年) 十一頁下段。
 - (43) 奈良文化財研究所編『飛鳥藤原京木簡一』(二〇〇七年) 六四号。
 - (44) 『日本書紀』持統称制前紀朱鳥元年(六八六) 十一月壬子条。
 - (45) 前掲注(43) 書。
 - (46) 奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告―長屋王邸・藤原麻呂邸の調査―』(一九九五年)。
 - (47) 朝原内親王については、『日本後紀』延暦十五年(七九六) 十二月辛未条に「朝原内親王第」、そして『類聚国史』卷百六十五の桓武天皇十六年六月辛酉条に朝原内親王の「御監及家司」がみえる(祥瑞上・雀)。大原内親王については、伊勢にいた在任中に、乙訓郡と葛野郡の土地を賜与されている(『日本後紀』大同四年(八〇九) 正月甲寅・三月戊辰条)。
 - (48) 榎村寛之「斎宮の「宮」的性格について」(『伊勢斎宮の祭祀と制度』塙書房、二〇一〇年、初出は二〇〇六年)。
 - (49) 市大樹「木簡から見た飛鳥池工房」(『飛鳥藤原木簡の研究』塙書房、二〇一〇年)。
 - (50) 前掲注(43) 一八号。
 - (51) 榎村寛之「『斎宮式』の構造とその特殊性―『斎院司式』と比較しつつ―」(『伊勢斎宮の祭祀と制度』塙書房、二〇一〇年、初出は一九九六年)。
- 〔付記〕 本研究はJSPS科研費18K00304の助成を受けたものです。